

大津島の「回天」顕彰碑と慰霊祭

今年（平成二十五年）は、昭和十八年（一九四三）大東亜戦争の南方最前線ソロモン諸島で日本陸海軍が奮闘の末に撤退を余儀なくされてから満七十年にあたる。靖国神社の遊就館でも、現在（年内）ソロモン戦の特別展示が行われている。

実は私の父（所久雄）も、赤紙召集に応じてニュージョージア島へ上陸し、ムンダの激戦で七月二十七日に戦死した（満三十歳）。そこで同日を選び、靖国会館に百名近い方々の参加を頂き、「ソロモンの英霊を偲ぶ集い」を催した。数少ない戦友と未亡人は既に九十歳代、遺児でも七十歳以上であるが、全国ソロモン会（Email: info@japan-solomon.com）は、若い学僧崎津寛光氏やジャーナリスト笹幸恵さん等の尽力で運営されており、洵に頼もしい。

その翌日、山口県周南市でモラロジ研究所の研修会があり出講した後、翌二十九日、徳山湾の大津島へ参上した。ここは人間魚雷回天の訓練基地があった所で、今も立派な市立「回天記念館」があり、その遺跡と同館を訪ねたのである。

周知のとおり、人間魚雷回天は、昭和十九年に入って絶望的な類勢を何とか挽回するために、黒木博司少佐（大正十年（一九二一）生まれ、当時満22歳）が、血書「急務所見」で懸命に嘆願して、特別に許可された。九三式（昭和八年）の酸素魚雷を大幅に改良し、同十九年九月から大津島で特訓を開始。その六日夕方、黒木・樋口両大尉は、回天第一号艇に同乗発進したが、海底に突入して浮上できず、二人とも必死に遺書を認め、翌七日に絶命された。

その後、事故を教訓に改良を加えた回天は、翌年八月まで次々出撃して多大な戦果をあげたが、殉職・戦死は一四五名（享年平均21

歳）にのぼる。そこで、同二十年十一月、生き残った隊員が地元民の協力をえて、大津島に「回天碑」を建てた。けれども、その碑は翌年早々、占領軍の目を恐れて、バラバラにざれ埋められた。

しかし、同三十年十一月、元隊員たちが同地に集まって、慰霊祭を営み、以後毎年励行してきた。しかも三十五年には、徳山郷友会が呼びかけ全国の有志一万七千名に協賛をえて、新たに黒木少佐の血書「回天」を黒髪石に刻んだ石柱が建てられ（台座は旧碑のそれを転用）、翌年三月、盛大な除幕式が行われた。その側碑には平泉澄博士の撰文（別掲）と回天烈士の芳名が刻まれている。

さらに翌三十七年七月、戦友が全国に呼びかけて、「回天顕彰会」を発足。ついで四十三年十一月、烈士の遺品などを展示する「回天記念館」が完成、徳山市（現周南市）に寄贈された。その後も四十七年正月、黒木少佐の母堂わき様から手水鉢「浄水」、また六十二年九月、地元有志から実物大の鑄造魚雷「回天」も寄贈されている。

ただ、平成に入るところから、それまで神式で営まれてきた慰霊祭を、市立の記念館内に立つ「回天碑」の前で行うことが難しくなった。そのため、昭和三十年から祭主を務めてきた山崎八幡宮の河合信彦宮司が、基地内に安置されていた神棚と霊璽を同宮で預かって、毎年十一月二十日に本来の慰霊祭を私的に営み、大津島では追悼式典を公的に行う形となり、それが今も続いている。

そこで私は、回天記念館の松本紀是館長から懇切な説明を聴き、基地跡を案内して頂いた帰途、市内の山崎八幡宮へ参拝、河合昭彦現宮司から父子二代にわたる御苦勞話を承った。これも、戦後史の一資料として大切にしたい。

尚、黒木少佐の出身地岐阜県下呂市では、平泉博士の発願により昭和三十九年九月、信貴山上に楠公社が創建された。今年も九月八日、第五十回の回天楠公社祭が齎行された。

〔所 功〕